

鉄瓶に 霰



堀米秋良

墓洗ふガダルカナルと読めるまで

靈長類ヒト科人類被爆の日

渡り鳥望遠鏡を通り抜け

啄木鳥や森の鼓動の恙なく

戦争は畠の上に敏雄の忌

伏して泣く仰け反つて泣く涅槃かな

玉碎は昭和の歴史すみれ草

囁されてお天道さまも花に酔ふ

てのひらに載る一句集不死男の忌

叩いても鳴らぬラジオと暑い夏

芋の露触れなば落ちむ触れずとも

遠吠えは狼の血か雪月夜

鷹化して鳩日の丸は海を越え

籠枕から息の根にかよふ風

汗臭し馬に蹴られて死んだ筈

幽靈の十人十色盆の寺

古摩羅は手に睡たしや十三夜

ふぐと鍋夕日はいつも波の上

木枯のあと大いなる計がひとつ

月の夜の厨に十三の寒蛻

風垣して十三の湊のありとのみ

さくら湯の花一輪の日の出かな

辛夷咲く岩手の神は子沢山

鉄瓶に鉄の霰ややませ吹く

四畳半畳の上の原爆忌

みちのくは判官贔屓葛の花

見返ればやつぱり美人雪女郎

裏口にむかしの土の春の泥

英靈はみな土の下桜咲く

早起きは曾祖父ゆづり朝桜

朧夜は駱駝の背で涉りたし

人間は星を食ふ虫蠹ぼこり

亀鳴くといふ俳諧の世はうらら

文鎮のくるがね重き梅雨入かな

放屁して馬の春愁埒もなし

玉の汗搔きたし遠くまで歩き

ラジオから世界のニュース夕端居

ほぞの緒は土の下なり雲の峰

青畠踏めば足裏にみみず鳴く

ほとばしる水に力や竹の春

胃の腑まできれいに落ちし洗ひ飯

色鳥の色とりどりの番かな

一室にくぐもる紫煙獺祭忌

くちなはの縄一巻を推し量る

みちのくは一山三文栗ひろふ

縁側に座ればわれも柿日和

白障子三尺開けて人を恋ふ

黄落や筆舌夙に衰ふる

天網に引つ掛りたる鳩の贊

夕日いま終焉のとき干大根

 Tokyo Mnemosyne 東京ムネモシュネ

Tokyo Mnemosyne e-books

<http://haikustock.com>

A4用紙に印刷して2つ折りにします。右端をホッチキス留めするとA5判の小句集に仕上がります。
個人で楽しむ範囲でのダウンロード、印刷以外の無断転載・コピー・流用は一切禁止します。